Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

現代の中日国際結婚に関する社会学的研究

胡，源源

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2017-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6796号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006796

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

現代の中日国際結婚に関する社会学的研究

氏　　名　：　胡　源源

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名　（主）藤井勝　　教授
（副）平井晶子　准教授
（副）釜谷武志　教授

要　旨

本研究は「南北型」の中日国際結婚の中国人妻を事例として、「南北型」の国際結婚の外国人妻の生活世界を明瞭することを課題とした。各章の内容をまとめると以下の通りである。

まず、第 1 章では国際移動の視点から中国人妻が日本に結婚移住するプロセスを分析した。これまでのプッシ - プルの国際移動の枠組みではなく、国際移動のシステム論を借用してマクロの構造とミクロの個人の真ん中にあるメゾの移住媒介に注目し、国際結婚の移住プロセスを検討した。中国人妻の日本への結婚移住過程には「認知の媒介」、「推進の媒介」、「道具の媒介」という三つの移住媒介が介在する。この三つの媒介が相互連動して初めて結婚移住が成立できる。現時点で、東北地区において海外への移住が「大衆化」する傾向となっている。特に、近隣の日本、韓国への移住が盛んである。地元で移住のルートが多数開拓され、その中で、結婚がジェンダー化された移住の近道であるといち早く認知された。地元での海外移住の「大衆化」の傾向は、ミクロの移住者に移住の意志を生じさせることに多大に働いた。そして、結婚移住の道を知った女性に対して、その道に踏み込むことを大きく後押ししたのは「促進の媒介」である。この「促進の媒介」とは「人情社会」である中国における個人の「コネ」である。「コネ」は移住過程で二つの役割がある。一つ目は、連結である。ミクロの移住者を道具の媒介と連結させ、移住者を信頼できる道具の媒介の前に導く。二つ目は、推進である。促進の媒介は結婚移住者の結婚意志を強固にする。最後に、移住を実現する決め手は、「道具の媒介」――斡旋業者である。中日国際結婚に介在する道具の媒介には、これまでの先行研究で提示された「互酬型」や「商業型」の類型に還元できない「ミックス型」という新しいタイプの媒介がある。そして、具体的な斡旋プロセスにおいて、中国人妻の嫁ぎ先は支払われた手数料によって決められている。金額が高ければ高いほど、良い条件の嫁ぎ先になる。

第 2 章と第 3 章は、中国人妻の来日後の生活を中心に考察した。第 2 章は中国人妻と夫側親族の関係への考察を通して、中国人妻の家庭内での地位を分析した。結論からいうと、これまで先行研究で論じられた「弱い嫁」の姿が見られず、強い姿勢を示している中国人妻の姿が現れた。夫側の親族、特に姑と舅は中国人妻への「歓迎」「遠慮」「譲歩」という三つの態度を示している。いずれにしても「手ぐすねを引いて待っている元気な姑の姿」は見られない。家意識が強い農村部においては、家事や老親への世話といった嫁の役割が大きく期待されるはずだったが、実際には姑と舅の立場から、中国人妻に対して役割を過度に求めることはなく、優しく扱う。中国人妻が家で低く位置付けられなかった理由は以下の数点が考えられる。

第一に、戦後、「家」制度が廃止され、家父長権が大幅に縮小するにつれ、嫁の地位も相対的に高まった。このような背景のもとで、中国人妻たちも日本人女性と同じく嫁として地位が高くなっている。夫側の家族からの圧力が少なくなっていると考えられる。第二に、地方の若い日本人女性たちは都市部に流出し、男女の人口のバランスが崩れている農村では「嫁飢饉」の現象が始まって久しい。嫁不足の農村・地方では、日本人女性の代わりに、中年になった息子と結婚してくれる中国人妻は家族にとってありがたい存在である。せっかく来た中国人嫁に圧力を加えず、安心して暮らせるようにと、夫の家族から優しく扱われる。第三に、中国で男女平等のイデオロギーの影響をうけて社会化された中国人妻は、その価値観をそのまま日本に持ち込み、家族の誰にも左右されたくない姿勢で、家族の中に積極的に自分の居場所を作る。第四に、周りに中国人妻同士の間のネットワークが存在し、特に強硬な「先輩」の例をまね、家庭の中で強い姿勢を取る。

第 3 章では中国人妻のネットワークの解明を通して、彼女たちと地域社会との結びつきを検討した。聞き取り調査とアンケート調査のデータから、日本の農村・地方に結婚移住した中国人妻は地域社会で孤立的に存在するのではなく、社会的なネットワークを構築できていたことが分かった。しかも、中国人妻同士という同質性の高いネットワークである。ただ、①序列化されることへの拒否、②世代間のギャップ、③中国国内の地域文化の対峙の再現などの原因で中国人妻の間で互助組織やフォーマルな互助グループが形成されなかった。また、世代別で中国人妻のネットワークの特徴を見ると、「ベテラン世代」の中国人妻の早期のネットワークの特徴は「同国人単一型」であった。日本の生活に慣れるに伴い、生活の独立性が高くなるにつれて、中国人と日本人のどちらに力点をおいているのかはっきりと分かれない「バランス型」のネットワークになっている。一方、「適応世代」の中国人妻は、同国人同士のネットワークは自分と親しい関係を持つ「小グループ」の中国人妻に限定している。「新米世代」と濃密な関係を構築していない。日本人とも「弱い紐帯」を保っている。第三国出身の妻と出会う場所があるが、各自のネットワークの存在により、親密な関係が構築できなかった。総じて、「適応世代」の中国人妻は「同国人中心型」のネットワークを作っている。そして、「新米世代」の中国人妻は同国人同士への依存性が大きい。特に「適応世代」に多大な助けを求める。「新米世代」は中国人妻同士のネットワーク作りに積極的であるが、しかし、就労に日常の私的時間が多大に取られることによって中国人妻と出会うチャンスが減り、結局同じように「小グループ」の友人圏になっている。中国人妻なりの多くの喫緊課題に目が行き、日本人との交際にまで及ばない。第三国出身者と出会う場所があるが、各自に同国人同士のネットワークを持っており、繋がる必要がない。また、「新米世代」にとって、文化の壁、特に言語のハードルが高い。それゆえ、「新米世代」は「同国人単一型」のネットワークになっている。まとめると、

来日した中国人妻のネットワークの特徴は一様ではない。「ベテラン世代」がよりより「アトム化」した社会関係を持つのと対照的に、「適応世代」と「新米世代」は日本人より中国人妻の世界に偏っている。三つの世代にとって第三国出身者は「同質な他者」である。

第 4 章では国際移民のトランスナショナルな視点を取り入れて中国人妻と母国のつながりを論じた。親族関係の資源性から出発し、経済機能、再生産機能、情報機能という三つの側面から、来日した中国人妻と母国親族の相互作用を呈示した。経済機能において、来日した中国人妻は、海外に移住したフィリピン人女性のように定期的に送金せず、状況に応じて送金をしているだけである。しかも、中国人妻の送金は従来から認識されてきた単純な経済的救済という古典的な意味ではなく、個人のニーズを満足させるように生活様式を転換させるためという現代的な送金意味が強い。再生産機能においては、中日の育児規範の違い、あるいは高齢で日本人夫の親族に期待できないなどの理由から、出産や子育てに関して母国の親族が中国人妻に多大な支援を与える。他方、母国の親族が要ケアになった場合、中国人妻は帰国し、親のケアをして娘の役割を果たしている。情報機能において、中国人妻は帰国や母国の親族とのやり取りを通じて、お互いに情報交換をする。中日国際結婚における親族機能のトランスナショナルな連続性は、「血縁重視」、「孝」などの中国の伝統文化が作用している結果である。そして、1979 年に「一人っ子政策」の実施によってもたらされた中国の家族変動とも関わっている。さらに、日本の厳しい入国管理政策に代表されている制度上の制限というマクロな要素と、中国人妻が日本社会で調達できる資源の欠如というミクロの「現実」を呈示した。

第 5 章では視点が日本から中国に変わって、中国人女性の海外移住が彼女たちの出身地域にもたらした影響を論述した。現在、女性を多大に送り出す東北地区ではベトナムなど東南アジアからの外国人妻が流入している。筆者は本研究でそれを「東北型」の国際結婚であると名付けた。この「東北型」の国際結婚は以下の三点によって成立した。第一に、中国で年齢層、階層を問わない女性の海外移住の常態化によって人口構造の歪みや女性への信用危機が生じた。それは地元の結婚市場に、外国人妻を受容する空間を作り出した。第二に、女性の大量流出は地元の配偶者選択の基準の変容を牽引した。本来、結婚において男性に要求されていた経済的基準だけでなく、女性に課されていたジェンダー的基準も男性に対して大きく作用するようになった。第三に、東北地区の独特な移民文化は女性の国際的な出入りに寛容な環境を提供している。そして、結婚市場で周辺化され、やむを得ずグローバルな結婚市場で相手を探す家族は、外国人嫁がいつか家から逃げ出すという先入観を持ち、それを防止するために家族関係や「グローバルな世帯保持」において主体性を発揮して戦略を講じている。具体的には、外国人妻が嫁としての役割遂行をしない際に、中国の親は一家の嫁より息子の妻であるという役割認識を先行させた

り、はっきりと離婚を申し出る嫁に意識的に権威的な振る舞いを控えて家長の顔を隠したり、借金してまで送金に協力したりすることが見られる。

以上の五章は来日した中国人妻の生活をテーマとして検討を行った。第 6 章では範囲を東アジアまで広げ、日本だけでなく、東アジアに結婚移住した中国人妻の生活を明瞭にする。結婚移住プロセス、夫婦関係、親族関係、中国とのつながりなどの面で比較の視点を導入し、中日、中台、中韓家族の共通性と多様性を見出す。

第一に、結婚のプロセスについて、東アジアにおける中国人妻の越境結婚の典型的なパターンは、親族や友人の紹介を通して、中国で外国人夫と初対面で、そして結婚と同時に、あるいは結婚直後に海外に移住するというものである。以下、まず、中日国際結婚の特徴をおさらいする。中日国際結婚では、出会い場所において、中国が主流であるが、3 割強は日本である。知り合いの契機において、友人や親族の紹介がメイン、斡旋会社の仲介が一部である。多数が結婚と同時、また結婚直後来日した。結婚前からすでに日本に居住していた妻は 3 割近くいる。友人・親族の紹介や斡旋会社の仲介により日本で出会うというパターンは、族妻が就労のため来韓している間に夫と知り合うパターンと対照的である。中日国際結婚を中台、中韓と比べたときのもう一つの特徴は商業性質が濃いことである。第 1 章ですでに論じたが、中日国際結婚では、友人や親族の紹介によって夫と知り合ってもそれは単純な「互酬型」の紹介ではない。

中日結婚よりは割合が少ないが、韓国、台湾に結婚移住する場合も、特に筆者の調査によると、韓国への移住の場合も日本と同じように「商業型」や「ミックス型」が主流であるようだ。しかし、調査対象者の伝聞でしかなく数字データがない。各国・地域の実状を把握できない。表 6 - 11 によると、3 割近くの来日した妻は斡旋会社の仲介によって夫と知り合ったと明確に答えたが、台湾、韓国は 1 割未満である。中台結婚では、大陸妻は親族や友人の紹介を通して、大陸で夫と初対面で、そして結婚と同時に、あるいは結婚直後に台湾に移住する。ただし、夫の職業と合わせると、中台結婚は必ずしも「南北型」に限定されるわけではなく、「文化交流型」も含まれている可能性がある。台湾の地方における越境結婚の多様性に注意が必要である。次に、中韓国際結婚の特徴をおさらいする。漢族妻の場合、出会い場所は、中国が主流で、一部が韓国である。知り合いの契機は、友人や親族の紹介や、学校・職場での出会いである。漢族妻の大多数が結婚と同時、また結婚直後に来日した。夫との知り合いの契機については、友人や親族の紹介と学校や職場での出会いが同じ割合（4 割強）を占めている。また、4 割近くの妻が韓国で夫と初対面をしたことと合わせて考えると、漢族妻は留学や就労の間に夫と知り合って結婚した可能性がある。ここで、漢族妻の年齢層が 30 代、40 代に集中し、また学歴が中学校であるのが約

半数ということを考慮すると、留学の可能性が薄くなり、漢族妻は就労している（例えば、研修生として）間に夫と知り合って結婚したと推測できる。朝鮮族妻は、夫との出会いの場所が中国で、知り合いの契機が友人や親族の紹介であるのがメインである。ただ、結婚と来韓の関係において、日本、台湾、韓国（漢族）と少し異なる。結婚と同時や結婚直後に来韓するのが一番高い割合ではなく、結婚後、数年を経てから韓国に来たのが最も多い。その原因解明は今後の課題とする。

また、結婚式について、中日と中台結婚は中国で式を行うのが大多数であり、中韓結婚は韓国で式を行うのが大多数である。

第二に、中国人妻と外国人夫の夫婦関係について、各国・地域の半数以上の外国人夫は家事・育児に参加している。家事・育児参加において夫が協力的であるようにみえる。ただ、割合からみると、日本人夫の参加頻度の順位が一番下である。中国人妻は自らの結婚生活を肯定的に評価している。漢族妻の離婚意識が相対的に高い。離婚を考えた理由は夫の家族・親族および地域社会よりも、主に夫婦内部から生じる比率が高い。さらに、夫婦内部では夫の経済力より、個人の性格・パーソナリティや態度・考え方などの内面化された文化のほうが、より夫婦間葛藤の原因となる。

第三に、夫側親族との関係について、義理の親との居住関係において、中日、中台は同居が主流で、さらに、同居の中で「同居共財」（家計も同一）が大多数である。中韓は別居が主流である。義理の親の健康状態の一番悪いのが日本、それと対照に、韓国（朝鮮族妻）の義理の親は健康状態が良い。潜在する介護負担の一番高いのは日本である。義理の親と会う頻度において、日本の中国人妻、大陸妻、漢族妻の大多数は「毎日」会う。朝鮮族妻の大多数が「毎週」会う。親族と会う頻度において、日本の中国人妻と大陸妻の大多数は「半年に 1 回以上」、漢族妻の大多数は「毎日」、朝鮮族妻の大多数は「週 1 回以上」の頻度で会う。義理の親への支援において、「料理」、「掃除・洗濯」、「買い物」、「病院送迎」の項目で日本の中国人妻の支援頻度が一番高い。朝鮮族妻の頻度が最も低い。義理の親との関係の評価において、総体的に円満としている。

第四に、母国の親族との関係について、持続的に連絡を保っていると確認できる。日本の中国人妻、大陸妻、漢族妻の帰国頻度が高く、滞在期間が「1 週間～1 か月」に集中している。朝鮮族妻の帰国頻度が相対的に低く、滞在期間が相対的に長い。また、いずれの国・地域に結婚移住した妻でも大多数は出身家族や地域に支援していない。送金が最も行われた支援であるが、日本の中国人妻の 2 割、大陸妻の 1 割未満、漢族妻の 1 割、朝鮮族妻の 2 割未満だけが送金をしている。各国・地域で低率にとどまっている。そして、各国・地域では寄付先が少し異なる。